

木を取り上げ、真筆遺文の文献学的研究の一環として若干の検討を加えたい。

『上野郷主等御返事』の形木は、『定本遺文』の脚注に記された高知市要法寺所蔵のものが知られている。さらに千葉県夷隅郡夷隅町大竹家所蔵の一点の伝存を確認することが出来た。この二点の形木について検討を進めることとした。

まず、形木の本紙の袖に押された「身延蔵」の朱印等を手掛かりに身延山の宝物目録を検討した結果、形木の元となった真筆が身延山に伝わっていたことを明らかにした。すなわち、『上野郷主等御返事』は「真蹟身延曾存」遺文の一つであった。このことによって、『上野郷主等御返事』の文献的信頼性が大いに高まったといえよう。

つぎに、『上野郷主等御返事』は『定本遺文』では弘安二年に系年されていたが、形木に見られる花押、署名の書風の特徴から、弘安五年に系年されることを述べた。

ところで、『上野郷主等御返事』の真筆が身延山に伝わったものであったことから、形木の板行は身延山で行われたものと思われる。身延山参詣の折り、恐らくは久

遠寺において形木が参詣の僧俗に授与されたのであらう。日蓮聖人の真筆は、僧侶といえども容易には拝見することは出来なかったから、真筆をそのまま写した形木は大変な感激をもって持ち帰られたことであらう。形木が寺院ばかりではなく、一般の信徒の家に伝わったのは、このような理由によると考えられよう。大竹家には、江戸時代の身延山参詣を思わせる資料も伝わっているからである。なお、このような真筆の形木が、『上野郷主等御返事』以外にどの程度板行されているかは、今後の調査に俟ちたい。（『御遺文研究』二〇号に要旨を発表したので参照されたい。）

『池上永寿院開基戸川達安一門の研究と不受不施事件』

内 藤 潮 洲

日蓮宗七百年の歴史は流罪の歴史である。しかし又、これありし故に宗祖の本尊、開目抄相出現したのであった。

寛永七年四月二日幕府は身池対論後、日興日樹を流罪、他をば追放したが、四月二日決意同盟本尊から、五日訣別出立の光景は蓋し宗門史上の莊観であつたであらう。

ここに、宗内は二大奔流となり、当時苦悩したのは存亡の岐路に立った大名士族であつた。多くの寺院を建立、善根と共に尽力した戸川家一門も又、例外ではなかつた。

遼安後、何故か二代目正安は「墓の前にて法事有べからず其外葬礼の執り行い少も仕まじく候引導など猶以無用之事」と遺言し、法論も不要としたため墓標には、ただ「従五位下正安之墓」とだけ彫っている。寛文九年正安没後、「戸川御一門も悲田方にて候へ共寿徳院尼公御立切之由、状内にしるし給候」の日浣書状より一門混乱の様子が推察される。寿徳院とは家老戸川延令後妻で、先妻は遼安女で正法院殿日性神尼と称し、何故か帰居し尼となり弟の正安により墓標は永寿院に建立された。

その後、四代安風天折家督は弟達富になり、二万九千二百石は減禄移封、撫川五千石となるが、今もつてその理由が不明である。これより撫川戸川家菩提寺は天台宗永隆寺となるが、この濫觴は元禄十一年大乘寺住持日衷

不受僧故遠流となり、後に寺名を永隆寺と改称したのである。この永隆寺には戸川家初代、三代、五代、七代と奇数の墓標にして、他は妹尾盛隆寺に、しかし七代敬徳院殿義勇日秀大居士と改称した法名は永寿院に建立されている。

この永寿院、もとは蓮乗院又は不變院とあるが、蓮乗院は二世日東の院号であり、開山日遠は遼安没後の入山で直接関係は認められない。それ故、開山は歴史的過程より日樹であるが、池上と同様除歴されたのであらう。

遼安は最初から寺院とする意志で下屋敷としたのであらうか。又、庭瀬にある覚如山不變院よりして永寿院も最初はそのような名称と推測する。この不變院の開山城国院日鳳は不受僧であつたが、転向したのであらうか、能登妙成寺では鷲山院と称している。

次に、筑前の戸川家は系譜にはない。或いは、夫人が王孫なるも朝鮮女性故に忌避したものか、この女性と遼安に三人の男子を出生している。義弟に当る小湊十八代日延開山の妙安寺には、遼安百五十回忌に「高サ貳尺叁寸七步、はゞ七寸貳步、臺横長サ壹尺叁寸六步、堅ノ長サ五寸七步高サ三寸七步」に「本源院殿雲山玄英大居士元和二年五月二十五日」の位牌を造安、遼安の「安」を

用いて妙安寺としたのであろうか。

又、勝立寺三世日陽は達安の子である。しかし、日延と甥の日陽は対立し、思わぬ問題と発展していくのである。

日蓮聖人の国土観について

野 口 真 澄

はじめに

日蓮聖人は、国土について多様に論じられており、五義判では法華経の流布する化境としての国土の問題が論じられている。この五義判は、教判として、また弘法の用心として説示されたものである。この中に国判を設けられたということは、日蓮聖人にとって国ということに重要な意味があったためだと考えられる。このことを踏まえ、ここでは五義判中「国」について考察してみたい。

一、国判と「日本国」の意識について

五義判がまとまった形で説示され、それについて具体的な説明がなされているものとして『教機時国鈔』、『南条兵衛七郎殿御書』が挙げられる。これらによると国判とは、色々な国があるが仏法はその国にふさわしい教法を弘めるべきであり、諸経論によると日本国はまさしく法華経流布の国であるとするものである。この国判では、仏法を弘めるに際し、その化境として「日本国」について考察されている。このように日本国を意識されたのは、恩を報ずべき生国として、仏勅を蒙るものが法を弘むべき所在の国土として認識されたものと考えられる。

二、化境としての「国」について

五義判を知り弘法する際の方法に謗法退治がある。『守護国家論』では、諸経典の説示により、仏法を国王に付嘱することで国中に流布せしめ、国王、国民はその国の謗法者を退治しなければならぬと説示されている。ここでは、仏法流布の一領域として「国」が想定されている。このことは、国判の設定に深い関わりがあると推察される。

三、「閻浮提」の意識について